

木版彩色『九蔵之圖』について

島田 和幸^{1,2)}, 内藤美智子²⁾¹⁾ 東京医科大学 医学部 人体構造学教室, ²⁾ 日本大学 医学部 機能形態学系 生体構造医学分野

今回は、日本解剖学会百周年記念事業の際に出版された『日本解剖学会百年のあゆみ』（平成7年）の中の一冊である、記念誌『日本解剖学のあけぼの』（酒井 著）の日本解剖学年表に記載されている、1776年（安永5年）2月21日に甲州で町医の石氏・初鹿ほか3名が、刑屍した男性遺体の解剖を行ったとの記載に、何らかの関係があると考えられる『九蔵之圖』について報告する。

『九蔵之圖』の本体は縦×横645×275mmの彩色木版画であり、図の外装は縦×横3475×1205mmの大きさに簡易表装されている。この図の記載臓器とその説明文を意識すると以下の通りである。

1. 肺管：心臓の上に位置し呼吸の通路である。
2. 咽喉：喉は息の通り道で肺と連続していて、咽は気道の後ろで食道から胃に繋がっている。
3. 胸骨：笏の形で肺や気管の前に存在する。
4. 肺：蓮の花に似ており、空気が入らないと蜂の巣状であり、空気が入ると右は三葉、左は二葉となる。
5. 心：心臓から出る管は、右は右肺、次は肝に、中間の管は気道、左の管は左肺に入るとしている。
6. 胃：上部の部分は水や食物が入る為に大きく、下部は大腸の入口となっている。
7. 脾：形は馬蹄形で紫紅色を呈しており、胃の横に存在している。身体の栄養に重要な器官である。
8. 横隔膜：型はハトの尾の様な形状である。
9. 胆嚢？（判読不能）：形は酒のトックリ状で黄色を呈しており、肝の間に存在している。二合ぐらいの汁を含み、苦い味がする。
10. 肝：形は木の葉で紫紅色を呈しており、右は三葉、左は四葉の計七葉で、腎の前、胃の後ろに存在している。
11. 大腸：淡白色で型は屈曲、長さは三丈四尺で、食べ物を通し、上は胃で下は肛門へと通じている。（注：小腸も含まれている）
12. 膀胱：ひょうたん型で白色を呈しており、腸の下に隠れている。
13. 腎：大豆の形状で淡黒色を呈している。脊髄の両側に存在する生命の根元となる臓器である。

この図の全体像は、首のない胸腹部を開腹した図であり、男性の陰茎部前頭断図が中心部に画かれ、その周囲に各臓器の彩色図と説明文が記載されている。そして、これらの図の下段には、「安永五年に死刑が行われた折、医業の発展の為に死刑体の観察を希望したところ、見学が許され受け入れられた。この解剖観察記録を記録として残すことは今後の治療にとって大変重要である」と云う主旨の文面が見学者であった初鹿格祐・正良 識と連名で記され、二名の落款印が押されている。

村松学佑著『甲斐国医史』（平成15年）によれば、今回刑屍を観察した初鹿格祐含む数名の甲陽（現在の山梨県甲府市）の医師達は、京都の山脇東洋の門下生である。そのことから山脇東洋の著した『蔵志』ですでに人体構造について学び、その知識を確認する為に屍体見学を行ったところ、さらに学問を深めることができたと云う、彼らの意見がこの図の下段に前記の如く文章として記したものと察せられる。

しかし、首のない胸腹部を開腹し、かつ男性陰茎部が横断されている様に画かれている『九蔵之圖』の図は、『蔵志』の図と類似している点が多くみられるが、肝臓の図のみ『蔵志』の図と少し異なっていることに特色がある。このことより、『九蔵之圖』は『蔵志』よりも遥かに時代的には後であるが、『蔵志』の解剖書を最も信頼し参考とした為に、実際の解剖所見には注目が薄れ、『蔵志』の図とほとんど類似してしまったのではないかと考えられる。